くらがの

発行所　倉賀野神社
〒370-1201
群馬県高崎市倉賀野町 1263 番地
電　話　027-346-2158
ＦＡＸ　027-346-2184
例祭（秋季大祭）　10 月 19 日
春季大祭　　4 月 19 日
公式ホームページ　www.chinju.info/

村祭り

明治45年・文部省唱歌

村の鎮守の神様の
今日はめでたい御祭日
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
朝から聞こえる笛太鼓

年も豊年満作で
村は総出の大祭
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
夜まで賑わう宮の森

治まる御代に神様の
めぐみ仰ぐや村祭
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
ドンドンヒャララ　ドンヒャララ
聞いても心が勇み立つ

＊　＊　＊

祭りの笛太鼓の音はここしばらくの間、遠のいています。しかし、この歌を口ずさむと、気持ち高ぶるものがあります。小学校の音楽の時間に皆で歌いました。

待ちましょう、大人も子供も「総出の大祭」ができる日を。（宮司）

産　土

「産土」と書いて、うぶすな、と読みます。

この言葉を声に出してみませんか。

＊　＊

「産土」とは自分が生まれた土地。そしていま生活する地域のことも、「産土」と呼びます。

古くから人々は「うぶすな」を大切にしてきました。

いいかえれば、地元、ふるさと。

＊　＊

鎮守の社（やしろ）を「産土さま」ともいいます。

＊　＊

うぶすなの神社におまいりするのが産土詣（うぶすなもうで）です。

誕生した赤ちゃんの産土詣。家族の健康を祈る産土詣。そしてお正月も、産土詣は欠かせません。

＊　＊

ふるさとから離れて暮らす人も、折々に、生れた町のこと、なつかしい家族のことを思い出します。

そして、もし彼の地に行くことができなくとも、お家の近くの産土神社にお参りしてみてください。

思い立ったら、産土さまの鳥居は、いつでもくぐることができるのです。

小中学生の舞姫の稽古。小学三、四年生は「豊栄舞」。小学五年生と中学一、二年生は「浦安の舞」。稽古の始まりと終わりには、そろって正座し、御神前に拝礼します。真剣に取り組む姿は、神様もきっとご覧いただいていることです。

神棚と御神札のお話

◎新年に神棚におまつりする御神札の一そろえを「お正月さま」と云います。

我が家に神棚をおまつりすることは、とても幸せなことです。神様の前にいつでも手を合わせて、家族の健康・安全と繁栄を祈ることができるのです。

神棚の向きは、神様（＝御神札）からみて南向きまたは東向き（北側または西側を背に）におまつりするとよいでしょう。

アパートやマンションにお住いの場合は、壁に釘など打たずに、簡易型の宮形を置いて御神札をおまつりすることができます。社務所に用意がありますので、どうぞお声掛けください。

◎御神札は、一年を通し、いつでも神社で求めることができます。新年を迎える前の十二月中に御神札を受け、神棚にお飾りした上で、お正月を迎えるお家が多いようです。

倉賀野町の近隣地域に伝わる「お正月さま」一そろえの御神札について、下の写真の番号順にお話ししましょう。

「お正月さま」御神札のまつり方の一例。神宮大麻（天照皇大神宮さま）は、つねに中央におまつりします。

①「神宮大麻」　皇室の御祖先神である「天照大御神」をまつる神宮の御神札です。「お伊勢さま」ともよばれ、日本中の家庭で、神棚のいちばん中央にまつられています。

②「歳神さま」　神棚に歳神様をまつることで、はじめてお家にお正月が来る、といわれます。新しい一年の恵みをもたらしてくださる神様です。

③「年中祓」　細長い形状のおふだで、昔は家の門口の竹筒に差しておき、帰宅すると、この神札を抜き取ってわが身にかざし、身に付いた災厄を祓い清めてから家の中に入ったといいます。今日では神棚に一緒にまつることが多くなりました。

④「三本荒神さま」　生活に欠くことのできない火と水の清浄をお守りいただきます。幣台の上に三本並べて差し立てます。もともとは竈門や井戸、便所などの各所に立てたといいますが、今日では神棚にいっしょにまつることが多くなりました。また台所におまつりする家もあります。

①から④の御神札が一そろえとなって「お正月さま」とよばれます。

◎また、四月十九日に春の大祭を迎えると、神社から「鎮守倉賀野神社」の御神札を受けて、あわせて神棚におまつりします。古来、「春祈祷の御神札」とよばれてきたものです。

「倉賀野神社奉賛会」にご加入いただいているお家には、春の大祭ごとに、神社総代さんがこの御神札をお届けしています。

◎さらに御神札を旅先で受けたり、崇敬する神社から受けたりすることもあるでしょう。すると神棚の中も、だんだん混みあってまいります。

日本は「八百万の神」の国ですから、いっそう神さまのご守護をいただくことで、それはたいへん喜ばしいことなのです。

宮形（神棚の社）の中に、いくつかの御神札を重ねておまつりしたり、外に立てかけてまつることもあります。

ただし、いずれの場合にも①の「神宮大麻」をいちばん中央に、そして前面におまつりすることが大切です。

◎なお、年毎に新しい御神札を神社から受けておまつりし、一年を経た御神札は、これまでのご守護に感謝をこめて、神社に返納するのが古来の習わしです。

◎同居の御家族に御不幸のありましたときは、神棚の前に白紙を下げ、五十日間の喪に服します。忌明けののちに、再び神社にお参りしたり、家の神棚前の拝礼を再開します。「お正月様」の御神札は、年の途中でも社務所でお受けになるのがよいでしょう。

（お問合せ）
倉賀野神社社務所
☎０２７（３４６）２１５８

月次祭（つきなみさい）

毎月一日におこなわれる月次祭。十月一日も、朝六時三十分に開式しました。国家・皇室の安泰と、地域の安全を祈願する神事です。この日は高木千重子禰宜が祝詞を奏上し、一同が玉串をささげて拝礼しました。

直会のご神水拝戴はコロナのため自粛。続いて神職の講話がありました。お神輿の「わっしょい」は、「輪を一緒に」、また「和して背負え」の意味につながる。今は賑やかに神輿を担ぐ環境ではないけれど、今朝はこの場で一緒に唱和しましょうと、マスクの皆が一声だけ「わっしょい！」。

およそ二十分ほどの短い儀式を終えて、一同、爽やかな笑顔で散会となりました。

距離を保ち参列いただきます。月次祭に昇殿をご希望の方はどうぞ社務所にお声掛けください。

随想「自分神」

倉賀野神社総代会長　髙橋　義明

乱雑とした書棚から古い写真とその挨拶文の原稿が出てきた。昭和二十年に小学校一年生になった三十六人が並んだ同窓会のものである。

若くはないが、どうしょうもないほどの年寄りでもない。

私は宴会の前に「子供に返って楽しんで下さい。私も楽しませていただきます」と言ったことを覚えている。

心配があった、鼾と寝言である。

私のそれは騒音であり、野獣の咆哮だという。相部屋の人に迷惑を掛けてしまうことである。以前丁重に水泳の耳栓を配ったことがある。通販でさがした鼻に装着する器具も試してみた、効き目なく枕を投げ付けられ、廊下に運び出されたことがある。一計を案じていた、眠らなければいいのだ。そうすればイビキをかかない。ネゴトを言わない。しかし飲み明かすには体力がなくなっている。思いついたのが相部屋の人を潰してしまうことだ。酔わせて、寝かしてしまうのだ。私の方が先につぶれた。

目が覚めると赤い目をしたケンチャンが睨んでいた。一睡もできなかったという。

原稿の隅に

アメリカのビルに神の名を借りた飛行機が飛び込んだ、とある。

「お客様は神様です」三波春夫が言った。彼の歌、いくつか私にも唄うことができますが、このセリフだけは好きになれません。

客をみくびり、神はワガママと言った尊大で奢りを感じたからです。三波春夫と深いつながりがあったという作家の森村誠一は人物伝のなかで、

「舞台に立つとき、敬虔な心で神に手を合わせたときと同様に、心を昇華しなければ真実の芸はできない。芸の神髄は神を前にした表現であり、神が受け取り手、それが聴衆であり観客である。唄うとき、そこに私は神を見る」

神を信じることで、自分を高め、芸を磨いていたのです。

まいりました。侮りと不遜が私のほうにあったからです。

得体のしれぬウイルスで世界が荒れている。日本でも平安の昔からの神とその祭りがとどこおっている。

歳をとったせいで、神にかんして考えが変わってきた。神は心奥深くに潜んでいる自分神なのだ。人は誰でも神を抱えている。祭りはそれを司る親神と自分神との出会いなのだ。喜びや憂いもある。

三波春夫さんのようなすっきりとした言葉になりませんが、私の妄想です。

拝殿彫刻「手肘木（てひじき）・波に亀」

亀が見える。明治８年の拝殿造営の記録『諸職人日記録』に、８月「兼次郎 向拝 虹梁下 手肘木 浪ニ亀 始メ」とあり、彫物師 石川兼次郎の作とわかる。

■短信■

▽四月十九日　「春季例大祭」。あわせて御本殿保存修理工事の「竣工奉告祭」が斎行されました。氏子崇敬者の皆様の御奉賛のもとに御本殿屋根替え工事が無事完了したことを神前に奉告しました。

▽六月二十四日「神饌田の御田植祭」。　敬宮愛子内親王様の御誕生を記念して、境内に設置されたものです。御田植祭はことしで二十回目を迎えました。

倉賀野中の生徒有志も参加。

小さな田んぼなので、長靴でも中に入れません。

ことし９月29日の神饌田。

そして稲穂がめでたく実りました。秋の大祭にお供えします。

▽六月三十日　「夏越の大祓」。参拝者は参道の茅輪をくぐって疫病除けを祈願しました。社殿の中で大祓詞を一同で奉唱する儀は休止しましたが、一年を折り返す大切な区切りのときに、つみ・けがれを祓い清めることができました。なお大晦日の十二月三十一日には「年越の大祓」がおこなわれます。

▽十月三日　「神楽の集い」。高崎市と市神楽保存協議会の共催により開かれました。今回で五回目。

倉賀野神社附属太々神楽保存会（今井徳男会長）も出演し、「稲荷種蒔きの舞」を演じました。

保存会では神楽舞、笛太鼓などの会員を広く募集しています。もちろん、皆さん最初は初めての人です。お問合せはどうぞ社務所まで。

榛名文化会館「第５回神楽の集い」に倉賀野神社の保存会が出演。市内の神楽七団体が参加した。

「米沢藩と倉賀野氏」

権禰宜　髙木祐花

▷米沢の倉賀野氏　米沢市遠山町の西明寺を訪れた。そこに倉賀野長左衛門統基という人を初代とする、代々のお墓がある。前回（社報70号）にも取り上げたが、建長５年（1253）に本神社の社殿を造営したと伝わる、倉賀野三郎高俊の子孫である。

墓参した折に、ご住職から、市立米沢図書館で資料を見ることができると聞き、訪ねてみた。倉賀野家が代々上杉の家臣として仕え、屋敷を構えていたことを示す「米沢御城下絵図」を新たに見ることができ、大変感激した。

▷倉賀野城を去る　話は戻るが、倉賀野三郎高俊が社殿を造営してのち、当地の烏川左岸の崖上に倉賀野城が築かれている。しかし永禄７年（1564）、上杉謙信に従っていた城主倉賀野左衛門五郎直行は武田信玄に攻められて落城し、上杉氏を頼って越後に逃れることになった。直行は越後で名を倉賀野長左衛門統基と改め、直江山城守（兼続）直属の家臣団、与板衆を務めた。

その後、長左衛門統基は、上杉氏が越後から会津へ、さらに米沢へと転封を重ねるに、付き従う。二代行重以後は、米沢藩で最上級家臣団と称される侍組九十六家に名を連ね（『天保二年五月写，侍組席次』他資料より）、幕末の九代主殿まで上杉の家臣として仕えたという。

▷「川止め」の縁　文久３年（1863）、当社神主・高木出雲の日記がある。10月、米沢藩の一行が京から中山道を下る際に、川止めにより倉賀野宿に一泊したと書かれている。その中に九代・倉賀野主殿がいた。藩主の上杉斉憲が徳川家茂の上洛供奉と京都警護を命じられ、主殿がそれに随行していたのである。偶然にも３百年前の祖先の地を踏むことになり、主殿は従者２名を飯玉宮（現・倉賀野神社）に遣わせ参拝した。

▷幕末から明治へ　時代は幕末動乱期。ちなみに、現在の御本殿はこの頃、造営工事の最中で、慶応２年（1866）９月に完成している。主殿が倉賀野宿を通ってから５年後、慶応４年（1868）に戊辰戦争が始まる。米沢藩は東北諸藩と奥羽越列藩同盟を結び、新政府軍との激しい戦いへ進んでいった。主殿もまた、その渦中にあったと想像できる。記録によると、明治時代を迎えて間もなく主殿はこの世を去り、倉賀野氏は次の十代左源へと続くのである。